平成19年度企画展

重要文化財公開

# 首里城京の内跡出土品展

## ～青花の文様で観る～

開催期間：平成20年1月19日（土）～1月27日（日）

沖縄県立埋蔵文化財センター

# 目　次

ごあいさつ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1

◎ 展示のあらまし　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　2

◎ 首里城「京の内」跡とは　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　3

◎ 重要文化財指定基準　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　4

◎ 重要文化財指定の名称と指定理由　・・・・・・・・・・・・・・・・・・　5

◎ 重要文化財 首里城京の内跡出土陶磁器指定一覧　・・・・・・・・・・　6

◎ 展示品紹介　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　7

◎ 青花の文様（絵柄）で観る

Ⅰ.「青花」について（文責 金城亀信）・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13

Ⅱ　文様について　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14

1．花卉文　（文責 山本正昭）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14

2．植物文　（文責 山本正昭）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15

3．鳥類　（文責 山本正昭）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17

4．獣・動物　（文責 金城亀信）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17

5．魚・貝・珊瑚　（文責 金城亀信）・・・・・・・・・・・・・・・・ 18

6．象徴絵柄　（文責 金城亀信）・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 19

◎ 青花文様の中の現生種　（文責 知花史尚）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

# ごあいさつ

沖縄県立埋蔵文化財センター収蔵の首里城京の内跡出土の陶磁器は、国指定史跡首里城跡の復元整備事業に伴う平成６年度（1994）～平成９年度（1997）までの４ヵ年間実施された京の内地区の遺構確認調査によって出土しました。

京の内出土の陶磁器は、中国との進貢貿易、更に、中国と冊封を結んだ周辺諸国（タイ・ベトナム・朝鮮・日本など）との交易によって琉球王国に持ち込まれたものと考えられています。これら出土資料の中でも倉庫跡から一括して発見された陶磁器類のうち 518 点は、14 世紀中頃～ 15 世紀中葉に生産された世界的にも希少な貿易陶磁器であり、我が国の歴史上意義深く、学術的に特に価値の高いものとして評価され平成 12 年６月 27 日付けで国の重要文化財（考古資料）として指定されました。

中国との進貢・冊封関係によって周辺諸国の優れた文物が琉球王国へ流入し、沖縄独自の歴史と文化の土台が形成され、アジア諸国との交易をとおして発展した琉球王国の栄華がこれら京の内資料によって推し量ることができます。

今回の企画展は、重要文化財 518 点のうち中国陶磁器の青花（染付）に描かれている文様（絵柄）に着目し、その文様（絵柄）を「花」、「植物」、「鳥類」、「獣・動物」、「魚貝」、「象徴」の６つの項目に分類することで、文様の持つ意味や歴史的背景について新たな視点で青花の文様を観てみました。

この企画展をとおして、これらの陶磁器類が製作された当時の琉球を取り巻く歴史環境などを青花の文様（絵柄）から探ることで、重要文化財「首里城京の内跡出土陶磁器」に対する理解が深まれば幸いです。

平成 20 年１月 19 日

沖縄県立埋蔵文化財センター
所　長　　名嘉　政修

# 展示のあらまし

平成 12 年 6 月 27 日付けで国の重要文化財として「沖縄県首里城京の内跡出土陶磁器 518 点」と、この陶磁器と共に出土した金属製品とガラス玉の一括資料が指定されました。

指定された陶磁器は、平成 6 年度に国営首里城公園（国指定史跡首里城跡）内の「京の内」地区の復元整備事業に伴う遺構確認の為に実施した発掘調査で、1459 年の失火により焼失した倉庫跡から発見されました。

京の内の倉庫跡からは、火災により火熱を受けた多量の陶磁器類が発掘されました。これらの陶磁器は中国をはじめとする各国との進貢交易によってもたらされたもので、中国産の陶磁器を主体として、次いでタイ産、ベトナム産の順に減少し、僅かに日本産の陶磁器が含まれていました。その数量は 1,162 個体を数えました。

倉庫跡から出土した輸入陶磁器の主体となる時期は、15 世紀前半～中頃と位置付けられています。

今回の展示は、指定された陶磁器の中から青花（元・明）の文様（絵柄）に焦点を当ててみました。青花に描かれた絵柄について、その種類を分類し、絵柄が持つ歴史的な意味合いや価値観などを紹介します。

# 首里城「京の内」跡とは

首里城京の内跡は、正殿（せいでん）、南殿（なんでん）、北殿（ほくでん）、奉神門（ほうしんもん）などの政事（まつりごと）（政治）を行う建物が集中する区画の南西地区に位置し、面積は約 5,000 ㎡と考えられています。

「京の内（きょうのうち）」の「京」は、“ 霊力（セジ、シジ）” と同義語であり、その他にも神が降臨もしくは来訪する岩山や小島（南城市斎場御嶽（せーふぁうたき）の大岩を “ キヨウノハナ ”、また、名護市嘉陽集落の東海上にある小島を “ きょう ” とも称す）等の名称から、首里城「京の内」は、「神が降臨する聖域」と理解されると共に「霊力のある聖域」と解されます。

さらに「京の内」には、絵図や文献などから沖縄の開闢二神（かいびゃくにしん）降臨の御嶽（拝所）とされる、“ 首里森御嶽（しゅりむいうたき） ”・“ 真玉森御嶽（まだまむいうたき） ” の二つの御嶽以外に、「京の内之三御嶽（きょうのうちのみうたき）」と称された三つの御嶽が存在したようです。

重要文化財指定を受けた資料は、沖縄県教育委員会が 1994 年から 1997 年にかけて実施した復元整備事業に伴う発掘調査で、京の内北西地点から、火熱を受けた状態で中国陶磁器をはじめとする多くの陶磁器類が一括して発見されたものです。文献などから、倉庫跡（3m × 4m）と考えられています。

首里城の図

# 重要文化財指定基準

## ◎ 考古資料の部

### 重要文化財

一　土器、石器、木器、骨角牙（が）器、玉その他縄文時代及びそれ以前の遺物で学術的価値の特に高いもの

二　銅鐸（たく）、銅剣、銅鉾（ほこ）その他弥生時代の遺物で学術的価値の特に高いもの

三　古墳の出土品その他古墳時代の遺物で学術的価値の特に高いもの

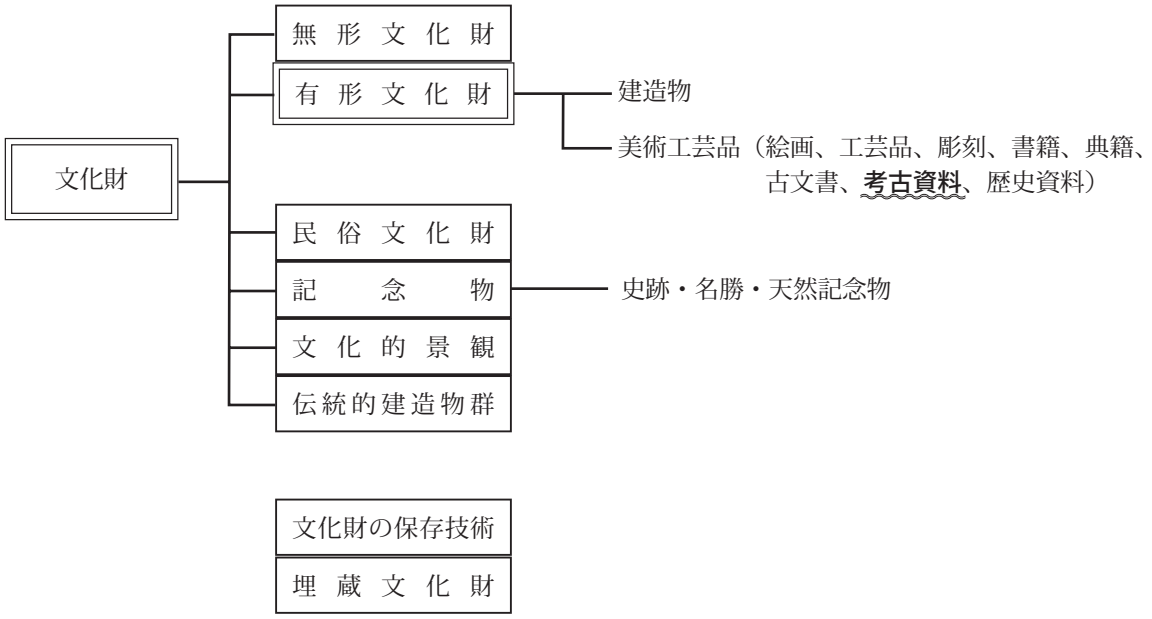
四　宮殿、官衙（が）・寺院跡、墓、経塚等の出土品その他飛鳥・奈良時代以後の遺物で学術的価値の特に高いもの

五　渡来品で我が国の歴史上意義が深く、かつ、学術的価値の特に高いもの

※○ 国宝及び重要文化財指定基準、・（中略）・基準（抄）（昭和 26 年 5 月 10 日文化財保護委員会　告示第 2 号）〔最終改正〕平成 8 年 10 月 26 日文部省告示第 185 号より一部抜粋。

## ◎ 文化財の種類

（平成 17 年 4 月 1 日施行の文化財保護法の一部改正により、「文化的景観」が新たな文化財として位置付けられた）




・建造物、絵画、工芸品、彫刻、書籍、典籍、古文書、考古資料、歴史資料などの有形の文 化的所産で、我が国にとって歴史上、芸術上、学術上価値の高いものを総称して有形文化財 と呼んでいます。このうち、建造物以外のものを総称して「美術工芸品」と呼んでいます。

国は有形文化財のうち重要なものを重要文化財に指定し、さらに世界文化の見地から特に 価値の高いものを国宝に指定して保護しています。

※ 首里城「京の内跡」出土の陶磁器等は、「国宝及び重要文化財指定基準」の「考古資料の部」で、国の「重要文化財」として指定答申を受けたことになります。

# 重要文化財指定の名称と指定理由

（考古資料の部）

名称及び員数：沖縄県首里城京の内跡出土陶磁器　　518 点

附　一、金属製品　　一括

附　一、ガラス玉　　一括

所　有　者：沖縄県（沖縄県立埋蔵文化財センター保管）

（庁保美第３の３号平成 12 年６月 27 日付け「重要文化財の指定について」
文化庁次長より沖縄県教育委員会教育長あて通知より作成）

説 明 文：　　尚氏第一王統時代

本件は、沖縄県那覇市首里当蔵に所在する首里城内郭の南西部にあたる、京の内跡の建物跡から出土した陶磁器の一括である。

「京の内」は霊力のある聖域という意味があり、なかに存在した首里森御嶽（しゅりむいうたき）は琉球王国の最高神女である聞得大君（きこえおおきみ）が神を迎えて、歴代の琉球国王に託宣を下した拝所である。

この京の内跡の発掘調査は国営沖縄記念公園首里城地区整備事業の一環として、平成６～７年度に実施され、約 2000 平方メートルが調査された。その結果、この建物は天順３年 (1459) に焼失したことが判明した。

出土した陶磁器は、中国産の青磁、白磁、明代の染付を中心に、元代の染付、色絵、褐釉陶・磁器、瑠璃釉、紅釉など、タイ産の褐釉陶器、ベトナム陶器、日本の備前陶器等で構成されている。これらは概ね 14 世紀中頃から 15 世紀中葉のものである。なかでも紅釉水注は、北京の故宮博物院に２点と景徳鎮窯跡出土の破片１点が確認されているのみである。また、元染付の合子は遺存する部分は少ないが、きわめて貴重な出土例である。

また、中国産の陶磁器を中心に、タイ、ベトナム、日本などアジアの主要な陶磁器の生産地から交易によって集められたものが出土している。

琉球王国は首里城正殿前につられていた「万国津梁鐘」の銘文に「船舶を諸国と結ぶ小橋とすることによって異国の宝物類が国中に充満する」( 訳文の趣旨 ) とあるように、中継貿易で栄えた琉球王国の繁栄ぶりを如実に示す貴重な一括資料である。

なおこの建物跡からは、兜鉢、小札、鎖帷子、釘、鍔等の金属製品、火災の際に溶着したガラス小玉塊が出土しており、あわせて保存を図りたい。

（文化庁文化財保護部監修『月刊文化財』平成 12 年６月号より抜粋）

※ 官報告示：平成 12 年６月 27 日付け文部省告示第 120 号

※ 文化財保護法（昭和 25 年法律第 214 号）第 27 条第１項の規定により、平成 12 年６月 27 日付けで重要文化財に指定。

# 重要文化財　首里城京の内跡出土陶磁器指定一覧

重要文化財　考古資料の部

指定名称及び員数：沖縄県首里城京の内跡出土陶磁器　518 点

附（つけたり）　一、金属製品　一括

附（つけたり）　一、ガラス玉　一括

重要文化財 陶磁器内訳

| 種　類 | 器種：点数 | 器種：点数 | 器種：点数 |
|---|---|---|---|
| 青磁（289 点） | 碗（わん） 103 | 皿（さら） 117 | 盤（ばん） 32 |
| | 壺（つぼ） 20 | 大花瓶（おおかびん） 2 | 馬上杯（ばじょうはい） 1 |
| | 水注（すいちゅう） 3 | 瓶（びん） 5 | 香炉（こうろ） 3 |
| | 水滴（すいてき） 1 | 花盆台（かぼんだい） 1 | 大鉢（おおばち） 1 |
| 白磁（33 点）（はくじ） | 碗 14 | 皿 11 | 杯（はい） 2 |
| | 水注 1 | 壺 1 | 瓶 4 |
| 元染付（げんそめつけ）（2 点） | 馬上杯 1 | 大合子（おおごうす） 1 | |
| 明染付（みんそめつけ）（58 点） | 碗 32 | 皿 4 | 杯 3 |
| | 鉢 1 | 瓶 14 | 壺 4 |
| 色絵（いろえ）（3 点） | 碗 2 | 皿 1 | |
| 紅釉（こうゆ）（1 点） | 水注 1 | | |
| 瑠璃釉（るりゆ）（2 点） | 碗 1 | 瓶 1 | |
| 褐釉磁器（かつゆじき）（1 点） | 碗 1 | | |
| 褐釉陶器（かつゆとうき）（35 点） | 壺 30 | 水注 1 | 鉢 1 |
| | 壺蓋（ふた） 1 | 特殊壺 1 | |
| | 蓋（ふた） 1 | | |
| 白釉陶器（はくゆとうき）（3 点） | 壺 2 | 水注 1 | |
| タイ産褐釉陶器（さんかつゆとうき）（55 点） | 壺 55 | | |
| タイ産半練土器（さんはんねらどき）（22 点） | 蓋 18 | 壺 4 | |
| ベトナム陶器（3 点） | 瓶 1 | 水注 2 | |
| 備前ほか（本土産）（6 点） | 擂鉢（すりばち） 1 | 甕（かめ） 3 | 壺 2 |
| 瓦質土器（沖縄産）（5 点） | 蓋 5 | | |
| 合　計　518 点 | | | |

# 展　示　品　紹　介

せい か りゅうもんこうそくはい
## １．青花龍文高足杯

14 世紀後半：元代末明代初

口径　14.2cm

器高　11.8cm

底径　4.7cm

【主な文様】

外面＝龍

内面＝型起こしの三爪龍

内底面＝檜扇花文

せい か ぼ たんからくさもんめいびん
## ２．青花牡丹唐草文梅瓶

15 世紀：明代

口径　5.5cm

器高　35.2cm

底径　12.3cm

【主な文様】

口縁＝亀甲繋ぎ文

肩・胴下部＝ラマ式蓮弁文

胴部＝牡丹唐草文

せい か ぼ たんからくさもんめいびんふた
### 青花牡丹唐草文梅瓶蓋

15 世紀：明代

口径　9.0cm

器高　8.4cm

【主な文様】

蓋甲＝如意頭文

胴部＝唐草文

せいかうんどうてもんびん
## ３．青花雲堂手文瓶

15 世紀：明代

【主な文様】

頸部＝梅月文

胴部＝雲堂手文

せいかほうそうげからくさもんわん
## ４．青花宝相華唐草文碗

15 世紀：明代

口径　14.4cm

器高　7.1cm

底径　5.9cm

【主な文様】

外面胴部＝宝相華唐草文

内面口縁＝四方襷文

せいかまつうめじゅもんそうじかびん
## ５．青花松梅樹文双耳花瓶

15 世紀：明代

口径　14.0cm

器高　41.4cm

底径　12.8cm

【主な文様】

口縁＝如意繋ぎ雲文

頸部＝芭蕉文・獅子・蓮弁文

胴部＝松・梅

胴下部＝青海波文

せいかうんどうてもんびん
## ６．青花雲堂手文瓶

15 世紀：明代

口径　6.5cm

【主な文様】

口縁～頸部＝芭蕉文

頸部下部＝宝相華唐草文

せいかはっぽうもんおおごうす
## ７．青花八宝文大合子

14 世紀：元代

身・蓋のサイズ

口径　30.4cm

器高　18.3cm

底径　22.2cm

【主な文様】

蓋甲＝人物・波濤文・ラマ式蓮弁文
・八宝文・菊唐草文

身＝菊唐草文・ラマ式蓮弁文

せいかぼたんからくさもんつぼ
## ８．青花牡丹唐草文壺

15 世紀：明代

口径　22.6cm

器高　37.3cm

底径　20.9cm

【主な文様】

口縁＝波濤文

肩部・胴下部＝ラマ式蓮弁文

胴部＝牡丹唐草文

せいかぼたんからくさもんつぼふた
## 青花牡丹唐草文壺の蓋

15 世紀：明代

縁直径 26.0cm

内径　17.4cm

【主な文様】

蓋＝捻花文・如意頭雲文

せい か　き りんもんざら
## ９．青花麒麟文皿

15 世紀：明代
口径　20.8cm
器高　4.8cm
底径　12.2cm

【主な文様】
外面＝宝相華唐草文
口縁内面＝四方襷文
内底面＝麒麟文

せい か　き りんもんざら
## 10. 青花麒麟文皿

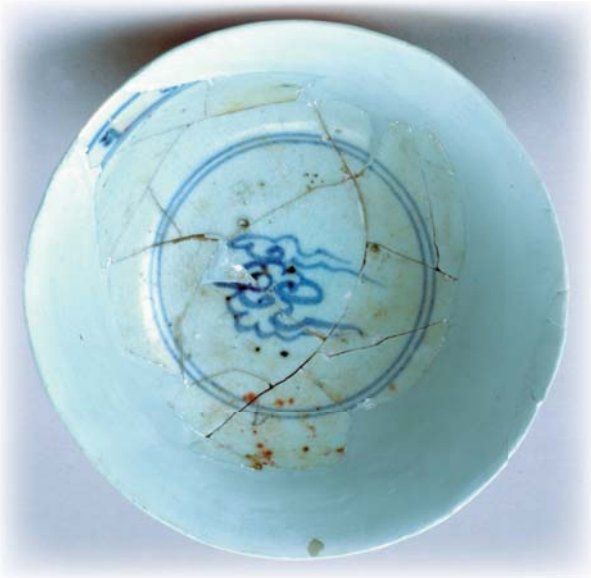
15 世紀：明代
口径　20.0cm
器高　4.4cm
底径　12.1cm

【主な文様】
外面＝宝相華唐草文
口縁内面＝四方襷文
内底面＝麒麟文・松・火焔宝珠文

せい か うんどう て もんわん
## 11. 青花雲堂手文碗

15 世紀：明代
口径　15.4cm
器高　7.4cm
底径　5.4cm

【主な文様】
外面口縁＝雷文
外面胴部＝雲堂手文
内面口縁＝梵字文？
内底面＝霊芝雲文



せい か うんどう て もんわん
## 12. 青花雲堂手文碗

15 世紀：明代
口径　15.4cm
器高　7.5cm
底径　5.6cm

【主な文様】
外面口縁＝雷文
外面胴部＝雲堂手文
内面口縁＝梵字文？
内底面＝霊芝雲文

せい か にょ い がしらもんわん
## 13. 青花如意 頭 文碗

15 世紀：明代

口径　12.6cm

【主な文様】

外面口縁＝雷文

胴部＝如意頭繋ぎ文

内面口縁＝パスパ文字？

せい か うんどう て もんびん
## 14. 青花雲堂手文瓶

15 世紀：明代

口径　6.5cm

【主な文様】

口縁～頸部＝芭蕉文

頸部下部＝雷文

胴部上部＝雲文・宝相華唐草文

せい か うんどう て もんびん
## 15. 青花雲堂手文瓶

15 世紀：明代

底径　8.6cm

【主な文様】

頸部＝唐草文

胴部＝雲堂手文・人物

胴下部＝雲文

せい か ぼ たんからくさもん　ふく　じ めいわん
## 16. 青花牡丹唐草文「福」字銘碗

15 世紀：明代

口径　12.0cm

器高　6.3cm

底径　5.4cm

【主な文様】

外面胴部＝牡丹唐草文

内底面＝「福」字文

せい か からくさもんびん
## 17. 青花唐草文瓶

15 世紀：明代

【主な文様】

頸上部＝芭蕉文

頸部＝パスパ文字？

頸下部＝唐草文

# ～青花の文様（絵柄）で観る～

## Ⅰ.「青花」について

中国語では「青花（青華）」の他に「釉裏青」ともいいます。そして、日本では一般に「染付」と呼ばれています。青花とは、陶磁器の一種で、白地の素地に青の顔料として用いられたコバルトによって文様や絵柄を施し、その上から透明なガラス質の釉薬（長石釉）を掛け、焼成します。高火度（1, 300 度前後）の還元焔焼成により、コバルトが鮮明な紺青色に発色します。コバルトは焼物にとっては鉄・銅とならんで重要な呈色剤（色彩の原料）なのです。

したがって、青花の条件要素とは、

一、白磁胎であること。

二、釉下彩技法であること。

三、コバルト顔料が使用されていること。

となります。

また、コバルトが呈色剤として中国陶磁にあらわれるのは、唐代の三彩陶（鉛釉の緑・白・褐の三色釉で彩られる、一般的に唐三彩と称されたもの）からといわれ、その中で藍釉として登場してきますが、唐三彩は軟質の陶器で低火度釉であり、磁器ではありません。青花は元代の景徳鎮窯で完成されたと考えられています。

景徳鎮窯の青花は「白地にはえる青」という青花の明晰な意匠（きめ細かな筆づかい、力強くシビアな描線、大小様々な文様を隙間なく的確に配置など）を白磁胎の上にくっきりと紺青色の文様を浮かび上がらせることに成功し、「青」の装飾世界をつくりだしました。

日本で呉須と称されるコバルトを中国では、回々青（回青）・仏頭青・蘇麻離青・天青・大青などたくさんの異称で呼ばれています。この中で回々青とは、文字のとおり回々、すなわち西方のイスラム圏からくる青料をさしています。

さらに、アメリカの物理学者Ｊ・Ｗ・ヤングによる、14 世紀の元青花のコバルト試料のＸ線分析の結果、コバルトに砒素が含まれていることがわかりました。そして、イスラム地方のコバルト鉱は、砒素が多く硫黄の化合物となって混在して産出していたといわれ、これによって元青花の顔料はイスラム圏からの輸入によることが判りました。また、元代の天暦三年（1330）の『飲膳正要』に回々青の記載があることも、イスラム圏からの輸入青料であることを裏付けています。

その他にも中国では、「土青」と総称される青色顔料を用いていました。成化年間（1465 年～1487 年）に用いられた江西省饒州府楽平県で産出された「陂塘青（平等青）」や正徳十年（1515）に使用された江西省上高県天則崗産出の「石子青」、そして浙江省産出の「浙青」などの土青があります。景徳鎮窯で用いられたコバルトは、イスラム産を除けば、ごく近い地域で産出する土青も用いていたようです。

## Ⅱ　文様について

### １．花卉文

花を愛でるという行為は世界各地においてみることができますが、中国においては陶磁器に描くことによって、新たな花の観賞法が産まれ、展開していきました。よって青花には様々な花が描かれ、そして洗練されたモチーフとして多様な構成で描かれていくようになります。

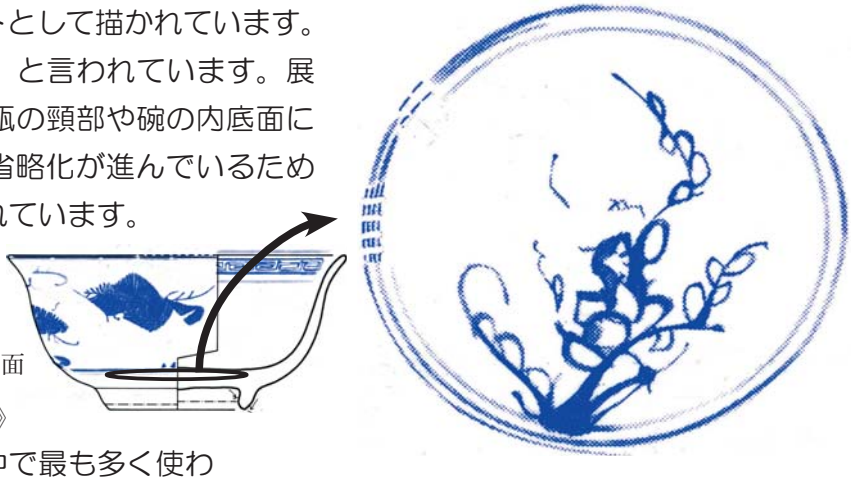
京の内跡から出土している青花には蓮弁文、梅花文、牡丹花文、菊花文、檜扇（ひおうぎ）花文、宝相華（ほうそうげ）文といった花卉文がみられます。菊花文、牡丹花文などは唐草の一部として描かれている場合が多く、碗、皿、壺、瓶の主要な文様となっています。稀に元青花龍文高足杯のように内底面に檜扇花文が描かれるものもみられます。

（１）「蓮弁（れんべん）」《10 頁８，22 頁》

この文様は碗、壺の下部に多く描かれています。とくに壺の下部にはインドのラマ教寺院で多く見られる蓮弁文、通称「ラマ式蓮弁文」の中に八宝を描く文様を見ることができます。

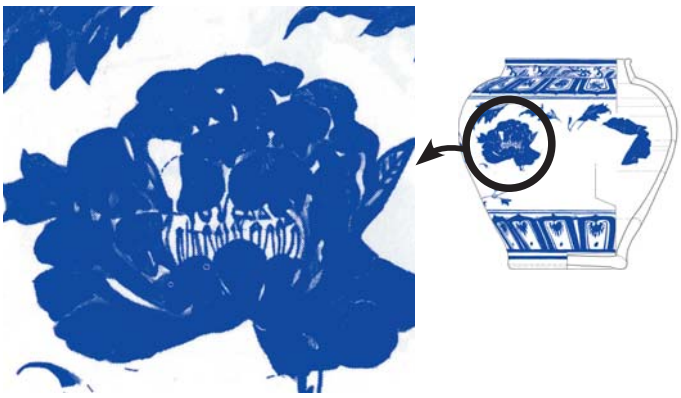
（２）「梅花（ばいか）」《23 頁》

梅花は月と枝、幹がセットとして描かれています。これらを総称して「梅月文」と言われています。展示資料で見られる梅月文は瓶の頸部や碗の内底面に描かれていますが、かなり省略化が進んでいるため梅花は丸文としてのみ描かれています。




（３）「牡丹花（ぼたんばな）」《10 頁８》

牡丹花は中国の陶磁器の中で最も多く使われている花卉文です。青花にも早くから牡丹のモチーフが使われ、17 世紀まで好んで描かれています。京の内跡から出土している青花は梅瓶や壺といった大型製品の主文様を飾る図案として用いられています。中でも青花牡丹唐草文壺はかなり写実的に描かれていることから、この青花が当時における特注品であることをうかがい知ることができます。

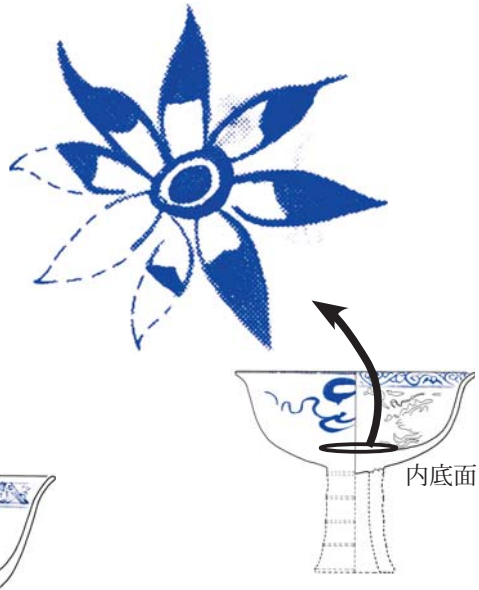


（4）「菊花（きっか）」《10 頁 7，22 頁》

菊は蔓（つる）状にはなりませんが、元青花では蔓状に描かれ、京の内跡出土のものでは元青花八方文大合子の身の胴部に唐草様の菊文、すなわち菊唐草文が描かれています。非常に密に花と葉を配していますが、花弁と花芯はかなり簡略化されています。14 世紀中頃から 15 世紀初頭にかけて青花では菊唐草文が最もよく描かれていますが、その後はほとんど見られなくなります。

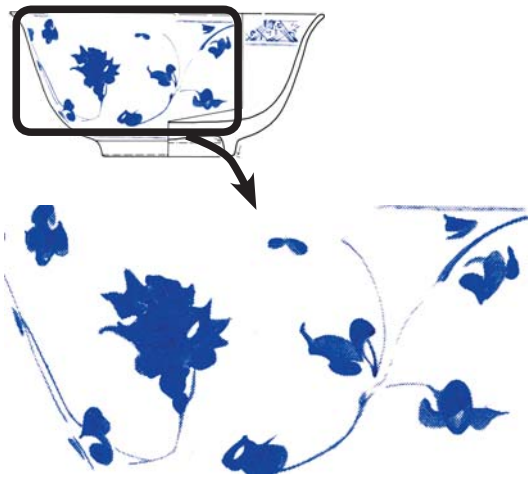
（5）「檜扇（ひおうぎ）花」《8 頁 1》

檜扇も菊と同様に蔓状にはなりませんが、元青花では蔓状に描かれ、唐草様として描かれています。京の内跡から出土している青花で檜扇花は小型の壺と馬上杯の内底面に描かれています。前者は唐草様に描かれ、後者は花の上面観を中央に描いています。




（6）「宝相華（ほうそうげ）」《9 頁 4，24 頁》

宝相華とはインドで見られる花文の一種が西域を経て、中国へ渡った文様です。古代から中国、日本でも文様として唐草風に描かれており、時代毎にそのデザインは変化しています。なお、モチーフとなった花は明らかではありません。



## 2．植物文

京の内跡から出土している青花には多くの植物が描かれています。植物文は樹木と草や茎（草文）に大きく分けられます。樹木は大型の皿や壺に主に見られ、碗にも少ないながらも内底面にワンポイントで梅が描かれる場合があります。草文で最も好まれて描かれるのは唐草文です。青花の出現時期から現在、製作されている青花においてもよくモチーフとして使われていることから、陶磁器と唐草文とは切っても切れない関係であると言うことができます。

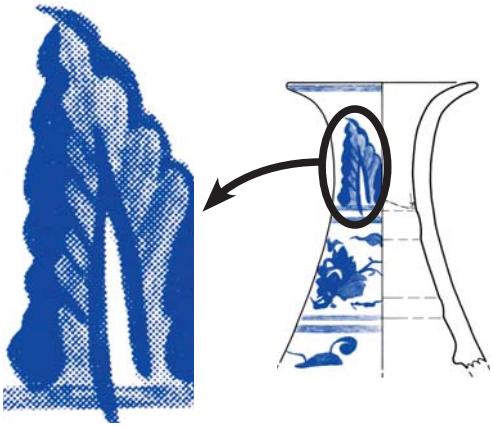
これらは主に吉祥文としての意味を有しており、これらの器に込められた思いを描かれた植物文から読み取ることができます。

（1）「松竹梅」《9頁5，22頁，23頁》

松竹梅文は吉祥文として最も有名です。松は松の齢すなわち長寿、竹は節操高くして廉潔、梅は清香にして文雅との意味が込められています。展示資料にはこれらの松竹梅文が碗や皿、瓶の主文様として描かれていますが、簡略化されており、かなり抽象的に表現されています。

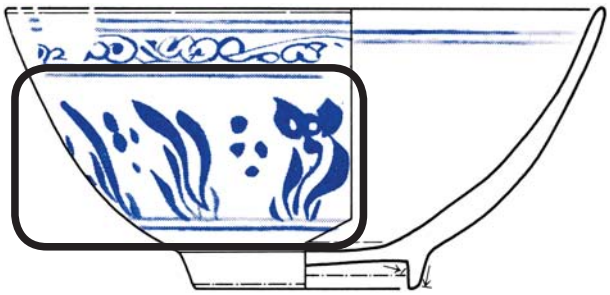
（2）「芭蕉文」《10頁6，24頁》

芭蕉は葉が大きく特徴的な形であることから、中国では好まれ観賞用として栽培されてきました。このことから青花においても主文様ではありませんが、主文様を引き立たせる脇役として、瓶や壺の頸部に芭蕉葉を縦に連続して描かれます。



（3）「浮草文」《23頁》

この文様は壺の胴部に、魚文と共に描かれることが多くあります。今回の展示資料では内底面のみに浮草文を描く明青花唐草文碗、胴部と内底面に描く明青花水草文碗をみることができます。かなり抽象的に描かれているため、残念ながら浮草の種類を特定することはできません。



（4）「唐草文」《9頁4，24頁》

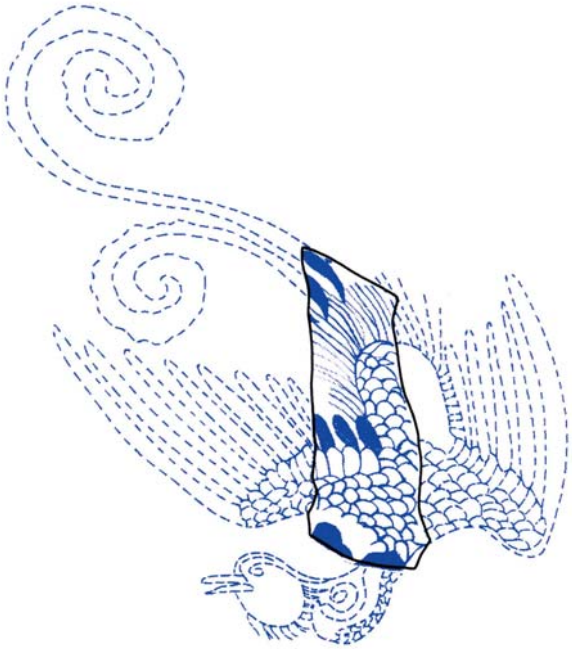
一定のリズムとカーブを繰り返す蔓をモチーフとしており、花や葉を配した唐草文はペルシャ以西から伝わった文様であると中国では云われています。日本には古代に伝わり、現在も好まれて用いられている文様です。また中国産の陶磁器においては器の形に関係なく、文様の中でとくに多く描かれている文様です。

## ３．鳥類 《24 頁》

今回の展示資料の中で鳥類が描かれている青花は１点のみです。描かれている鳥類は鳳凰で、大盤の底部にみることができます。残念ながら破片資料のため鳳凰の胴部から尾部にかけてのみうかがい知る事がでます。類例資料から鳳凰の周囲に菊唐草文や宝相華唐草文を配した艶やかな図柄であったことが推定されます。

鳳凰は想像上の瑞鳥です。亀、龍、麟と共に四霊とされており、その出現は世の好況と人々の幸運の前触れであるとみなされています。モデルとなったのは孔雀とされていますが、時代によってモチーフが大きく変わります。参考資料として展示している首里城跡 淑 順 門地区から出土した碗にも同様の鳳凰が描かれています。京の内跡出土の大盤と比べてやや省略はされていますが、吉祥文として好んで青花に描かれたことが分かります。

鳳凰以外にも鶯を内底面に描いている碗が首里城跡木曳門地区から出土しています。今回は参考資料として展示しています。鶯は春を告げる鳥として、喜びを表しており中国では「黄鳥」とも云われています。



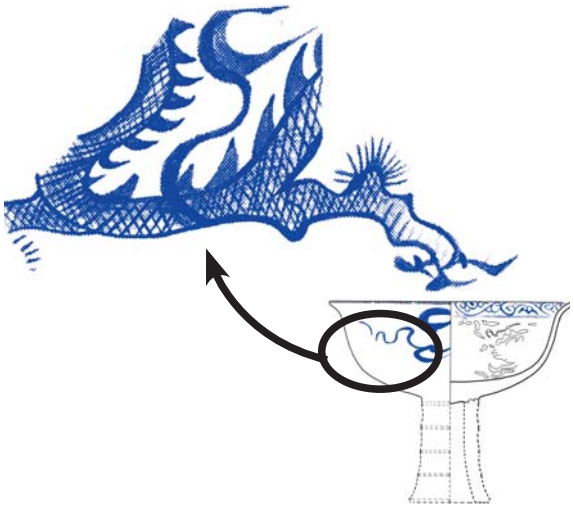
鳳凰

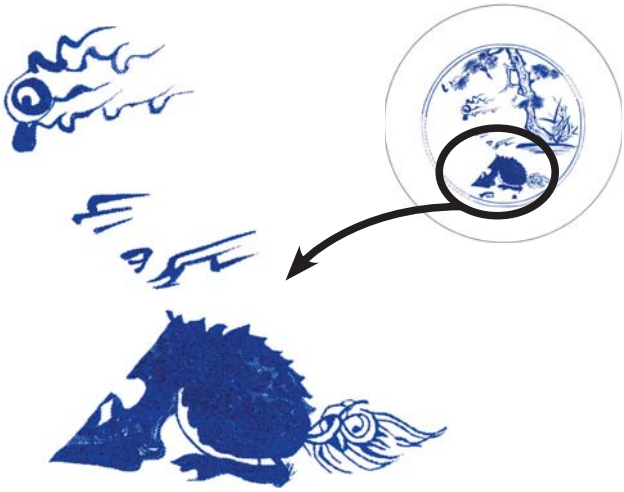
## ４．獣・動物

京の内跡から出土した中国青花に描かれた獣や動物をみると「龍」・「麒麟」・「獅子」があります。「龍」・「麒麟」は想像上の動物で、中国では龍・鳳・麟・亀を四霊（霊獣）とされています。以下、京の内跡から出土した元・明代の青花に描かれた「龍」・「麒麟」・「獅子」の文様をみてみます。

### （１）「龍」《8 頁 1，24 頁》

龍は元青花 龍 文高足杯（馬 上 杯）の外側胴部に描かれ、龍の首の一部と胴体部分が残っていました。前脚には鍵爪三本が描かれています。また、内側にも型で押した三爪の龍が施されています。中国では、龍の文様は宮廷以外では決して使用できないものとし、五爪の龍は天子（皇帝）に限り、四爪・三爪は天子一族が使用しました。琉球王国は中国との進貢・冊封関係によって、琉球の国王も四爪・三爪の龍の文様を使うことを許されたといわれています。中国が明から清にかわる頃から琉球国王の即位に際し、中国皇帝からのお祝いに五爪の龍があしらわれた服や反物が贈られたようです。以後、琉球王国でも五爪の龍の文様を使用したようですが、基本的には四爪の龍を使用していたようです。





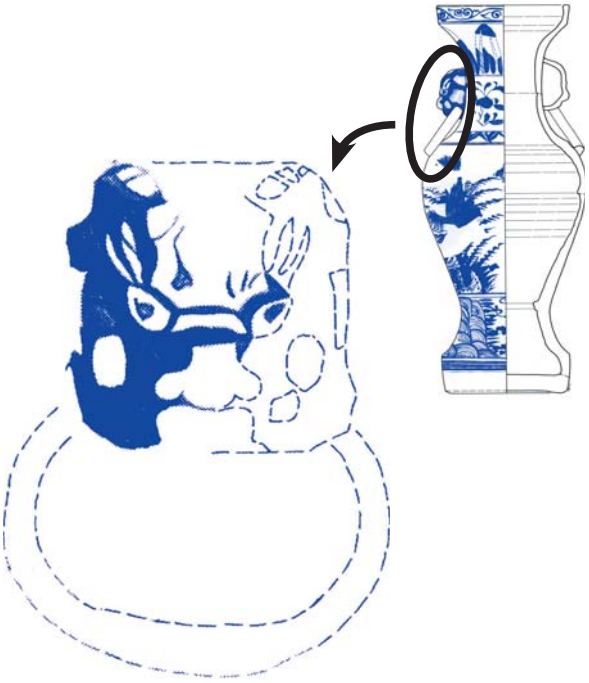
（2）「麒麟」《11頁10》

麒麟は中国の想像上の怜悧明哲の瑞獣で、徳の有る天子（皇帝）の治世に現れるとされていました。麒麟も龍・鳳・亀と共に四霊（霊獣）とされています。麒麟の麒は雄で、麟が雌とされています。麒麟は青花麒麟文皿（せいかきりんもんざら）の内側に描かれ、松の木の下で膝を折り曲げて休んでいる姿がみてとれます。麒麟の頭部近くには火焔宝珠文（かえんほうじゅもん）とみられる文様が施されています。

（3）「獅子」《9頁5》

獅子はライオンにあたるもので、これをモデルとした彫刻や文様などが西域では紀元前から多く用いられたようです。中国には聖獣として戦国時代（紀元前770年～紀元前221年）頃に伝わり、やがて邪気を払う魔除けの意味を持つ文様が定着します。その他に、明代や清代の宮廷では武官の一品・二品の官服に位を示す文様（補子という)として獅子文が刺繍されていたようです。また、繍球（しゅうきゅう）の玉を持った玉取獅子は強い男子を得る吉祥文とされています。

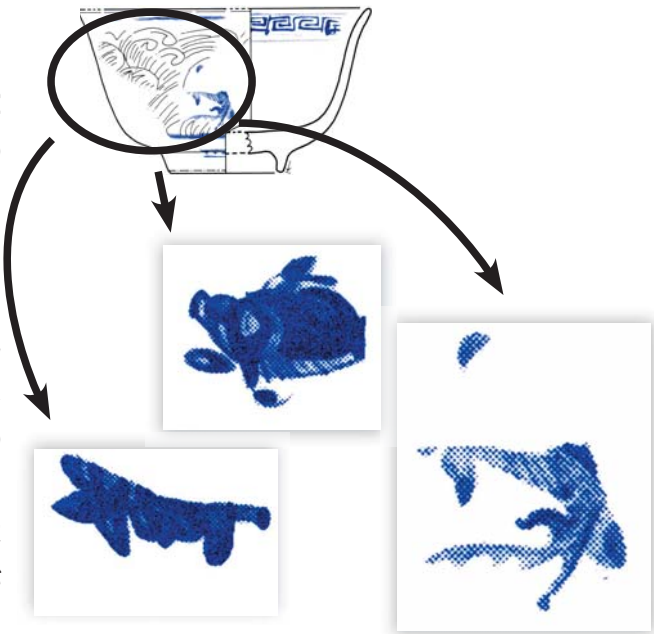
京の内跡から出土した青花で獅子がみられるのは、明青花松梅樹文双耳花瓶（みんせいかまつうめじゅもんそうじかびん）があります。首の部分に獅子の顔が二個貼り付けられており、二匹の獅子は輪っかを銜（くわ）えています。



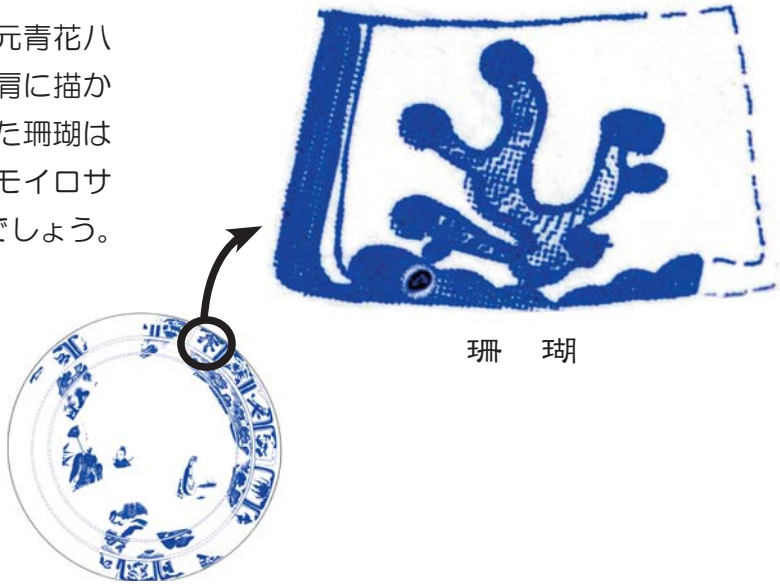
## 5．魚・貝・珊瑚《24頁》

京の内跡から出土した中国青花には、明青花碗の胴部に2・3尾の魚が描かれていますが、魚の種類は判りません。

貝については、京の内資料からは確認されていませんが、元青花八宝文大合子（げんせいかはっぽうもんおおごうす）の中に描かれていた可能性があります。仮に仏教と結びつくとすれば「法螺（ほら）」が考えられます。八宝文の中で法螺は第一位にあり、妙音吉祥（みょうおんきっしょう）の意味があり、八吉祥の総称とされているからです。参考までに「法螺」(ホラガイ）が描かれた資料として那覇市の湧田（わくた）古窯跡（現在の沖縄県庁）から出土した明青花の碗があります。



その他に珊瑚もあります。珊瑚は元青花八宝文大合子と明青花牡丹唐草文壺の肩に描かれた八宝文の中にあります。描かれた珊瑚は一般的に宝石珊瑚（アカサンゴ、モモイロサンゴ、シロサンゴ）といわれるものでしょう。



珊　瑚

## ６．象徴絵柄

目にみえる形や形をもたないものについて、それを連想させる形で表したものを象徴といいます。

京の内跡から出土した青花には、「雲」、「雷」、「波」、「文字」、「人物」などの他に、幸福の前兆といわれる八つの宝を文様として表現した「八宝文」があります。

ところで「八宝」とは仏教の宝物で、吉祥（良い兆し。目出度いしるし）をあらわしているとみなされていますが、特に「法螺」・「法輪」・「宝傘」・「白蓋（天蓋）」・「蓮」・「宝瓶」・「金魚」・「盤長（吉祥紐）」の８種類をいいます。道教では八仙人の持ち物である「魚鼓（木魚と、つづみ）」・「宝剣」、「花籃（花かご）」、「笊籬（竹籠）」、「葫芦（ひょうたん）」、「扇子」、「陰陽板」、「横笛」の８種類を「八宝」として位置付けています。

その他にも「珠」、「銭」、「磬（中国古代の石や青銅で作った打楽器の一種）」、「祥雲」、「方勝」、「犀角杯（犀の角を利用した杯）」、「書」、「画」を「八宝」として挙げています。

### （１）「雲」《12頁13》

雲を表現した例は、明青花の碗に多く描かれています。雲の多くは「霊芝雲文」または「如意頭雲文」と称される文様が描かれています。簡素化された雲として渦巻きを三個連結させたものや単独の雲を渦巻き状に三個描いたものなどもみられます。

その他、明青花の碗・瓶・大鉢には「雲堂手」もしくは「雲屋台」と称された文様がみられます。

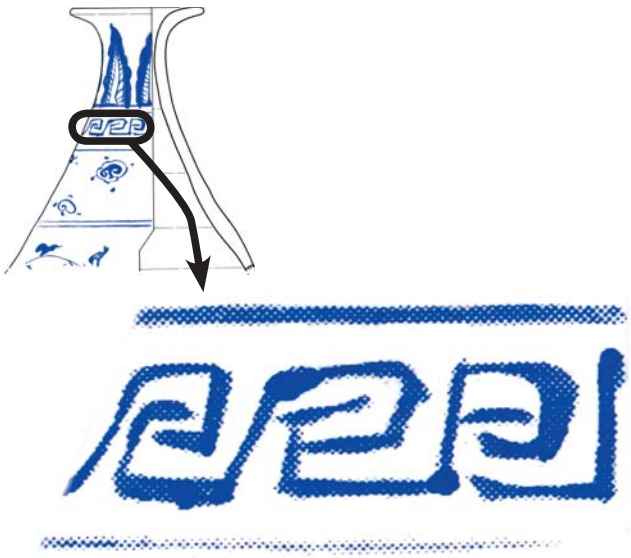
物語の推移を象徴する際に雲形を用いたり、雲形を描くことによって神仙の世界や神聖な境地を表現したと考えられています。例えば雲形を人物（皇帝や神仙・貴人などの特殊な高貴の人）の背景に描き、雲形で一場面の区切りとします。次に雲形を伴う楼閣・園亭などの建築物を描いたものもありますが、雲を伴う楼閣であれば神仙の住むところを暗示しているようです。

如意頭雲文

（2）「雷」《12頁14》

雷は、自然現象の雷雨が万物を潤すと共に、その文様は不断長久（ふだんちょうきゅう）を意味することから吉祥を象徴する文様として用いられています。雷を文様化したものが「雷文（らいもん）」あるいは「回文（かいもん）」と称されており、中国では先史時代の象形文字から発生したものとして考えられています。この文様は、京の内跡から出土した明青花の碗・皿でみることができます。

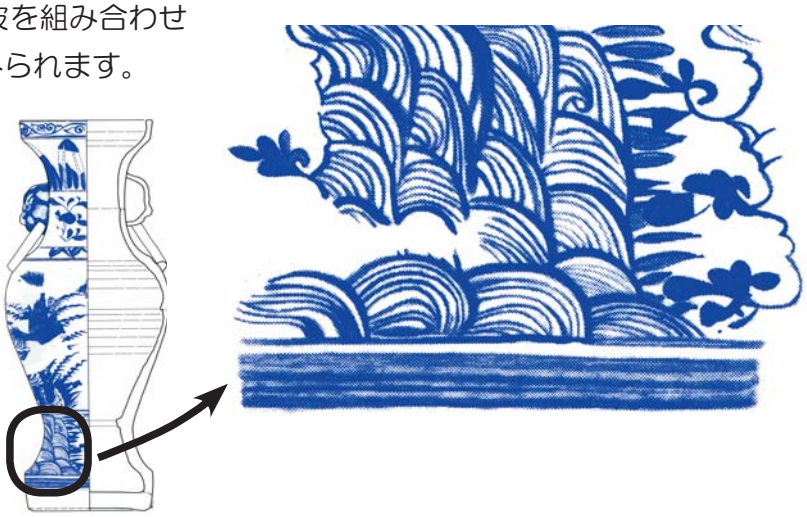
現在でも「雷文」の文様が中華料理店で使用される碗や皿などの縁に描かれています。



（3）「波」《9頁5》

青花に描かれた波は写実的に描いた元青花八宝文大合子と、写実的な波と抽象化した波を組み合わせた文様が明青花松梅樹文双耳花瓶にみられます。

明青花松梅樹双耳花瓶に描かれた波は、歪な半円を同心円状に重ねていますが、これも波を抽象化した文様で「青海波文（せいかいはもん）」と称されているグループに属するものです。

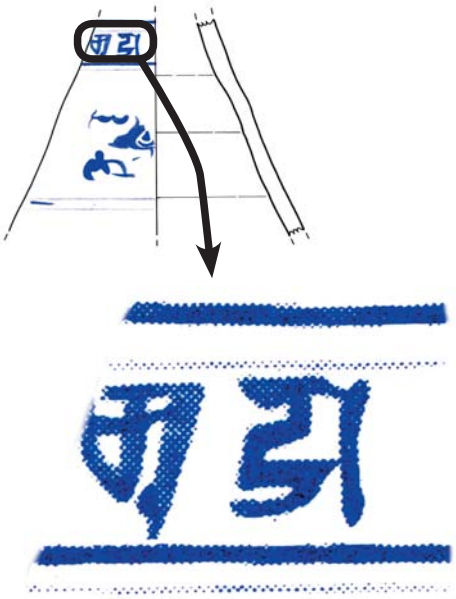


（4）「文字」

文字が描かれた青花は、内底（見込み）に「福（ふく）」の一字を描いた明青花碗があります。

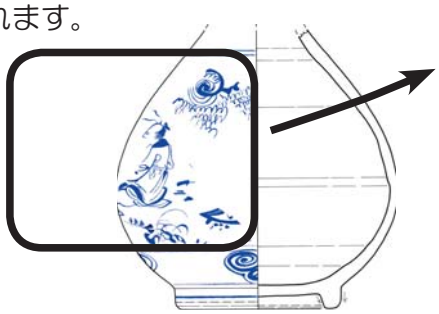
その他、明青花瓶の頸部に判読不能な「パスパ文字」（または「カリカ文字」など）を基本にした、文字を抽象的なデザインにして描かれているようです。当時の絵師が文字をデザイン化したのでしょうか。

パスパ文字はチベット仏教のサキャ派の法王であった八思巴（パスパ）がフビライハンの帝師となり、その命を受けてモンゴル語を写すために作ったもので、1272年から導入されましたが、1310年からカリカ文字に変更されます。



（5）「人物」《12頁15》

人物は元青花や明青花碗・大鉢・瓶に描かれています。元青花八宝文大合子には、大きな扇を持った従者が描かれていることから、隣に天子あるいは皇帝が描かれたのかも知れません。明青花雲堂手文瓶には、貴人か神仙が描かれています。その他に敷物を持った童子もみられます。

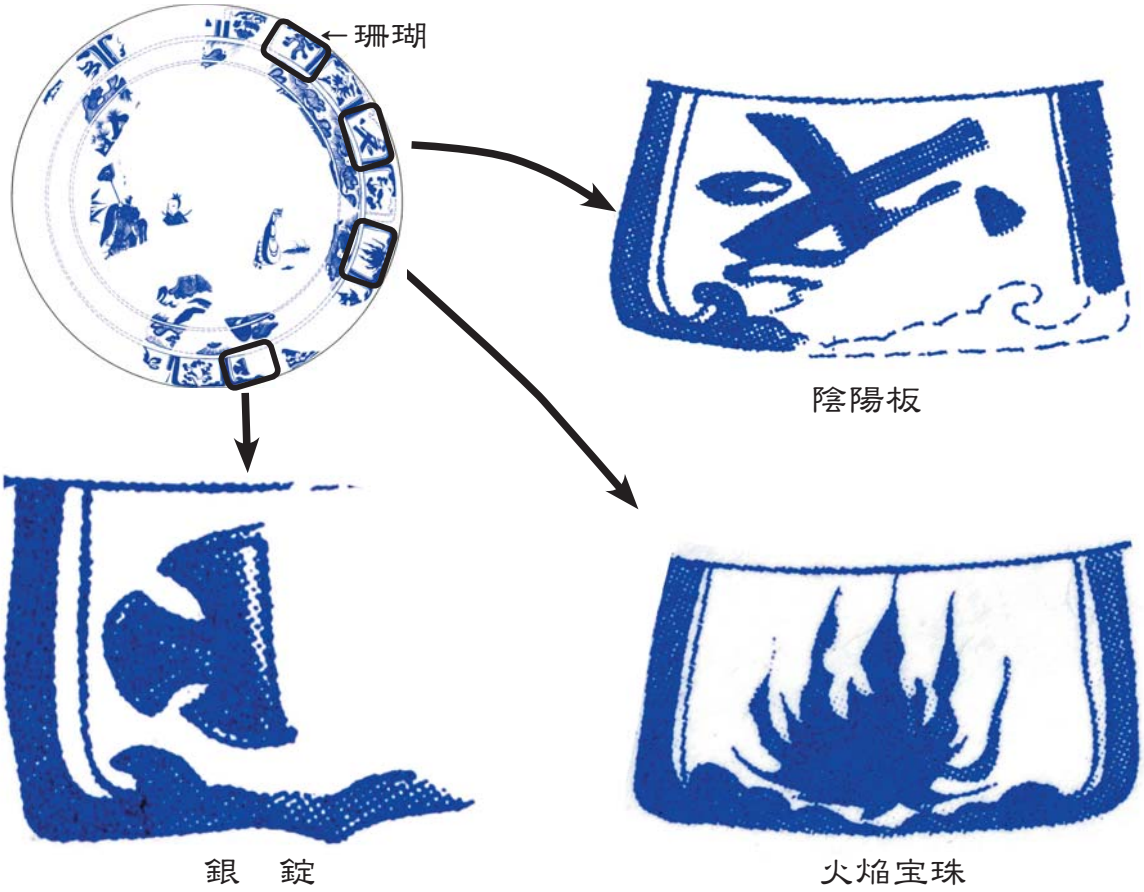


（6）「八宝文」《10頁7》

「八宝文」を描いた青花は、元青花八宝文大合子と明青花牡丹唐草文壺があります。

元青花八宝文大合子には、「珊瑚」・「銀錠（ぎんてい）（銀貨を十字に重ねる）」・「陰陽板」・「火焔宝珠」がみられます。

明青花牡丹唐草文壺の肩部には「珊瑚」・「繡球（しゅうきゅう）（刺繍された飾り珠の一種）」・「銀錠（単独と十字重ねの二種類がある）」・「宝傘」・「陰陽板」・「丁子（ちょうじ）（種子）」・「厭勝銭（えんしょうせん）（通貨ではなく吉祥の文句や特殊な図像を鋳出し、縁起物や護符とした銭）」の七つの宝が描かれていますが、残りの一つの宝物はわかりません。



# 青花文様の中の現生種

## 【睡蓮と蓮】《10頁8，14頁（1）》

睡蓮と蓮は混同しがちですが、両者は幾つかの点で見分けることができます。

| 見分け方 | | 葉の形 | 葉の状態 | | 花の位置 | 地下茎 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 睡蓮（すいれん） | 切込みあり | 水面に浮く（浮き葉） | 撥水性なし | 水面近く | |
| | 蓮（はす） | 切込みなし | 水面から立ち上がる（立ち葉） | 撥水性（水玉ができる） | 水面から高い位置 | レンコン（食用） |

生物学的な分類はどちらも双子葉植物のスイレン目に属しますが、ハス科とスイレン科に分かれます。スイレン科の方がハス科よりも原始的といわれています。

スイレンの仲間では南米原産の人を乗せることができるほどの大きな葉を持つ「オオオニバス」が有名です。一方ハスは、レンゲ（蓮花）とも呼ばれ原産地はインド亜大陸で、長期間発芽能力を維持することが知られています。

睡蓮 (*Nynmphaeaceae*) の花

蓮 (*Nelumbonaceae*) の花

## 【キク科植物】《10頁7，15頁（4）》

一般に菊は栽培品種を指しますが、野生種は国内に350種ほどが知られています。キク科の特徴は花が舌状花とよばれる小さな花が複数集合した1つの花に見えることです。沖縄の海岸にはイソノギクや希少種のオキナワギクなどが自生しています。他の地域から人が持ち込んだものにシロノセングサやヒメジオンなどがあります。

ジシバリ

イソノギク

## 【マ　ツ】《9頁5，11頁10，16頁（1）》

日本では長寿を表す縁起の良い植物とされ、松竹梅に代表されます。

葉のタイプから五葉マツ類と二葉マツに分類され、二葉マツ類にはアカマツ (*P.densiflora*)、クロマツ (*P.thunbergii*)、リュウキュウマツ (*P.luchuensis*) が自生してます。

リュウキュウマツは沖縄諸島と奄美諸島を含む中琉球と先島地方（南琉球）の固有種で世界でこの地域にしか分布していません。

## 【タ　ケ】《９頁５，16 頁（1）》

竹とはイネ科タケ亜科に属する多年生草本で大型のものを「タケ」、小型のものを「笹」とよび竹皮が前者では生育後落下し、後者は着生したままになります。国内にはマダケ、モウソウチクなどが生育しその殆どが帰化植物と考えられています。沖縄では山頂付近の涼しい場所にリュウキュウチクが分布しています。他に林内の下草としてエダウチチジミザサなどが分布しています。

## 【ウ　メ】《９頁５，16 頁（1）》

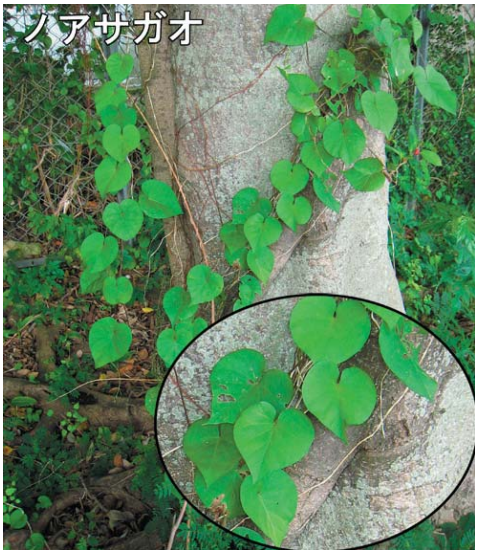
学名は *Prunus mume* で、バラ科サクラ属に属し原産は中国の長江流域です。８世紀半ば頃に日本に移入されたようです。

２月～４月頃に花をつけ、300 品種ほどが存在します。

沖縄には在来のウメは分布せず、隆起珊瑚礁などに梅花に似た花をつけるテンノウメが分布しますが、こちらはバラ科テンノウメ属に属します。

## 【藻　類】《16 頁（3）》

ワカメ形の葉を持つ藻類は県内ではアカヒルモやリュウスウスガモ、アマモなどが分布しています。これらは遠浅の砂泥地に自生するものが多く、小魚の生育場所や貝類などの分布として重要です。




## 【唐　草】～つる植物～

《８頁２，９頁４，10 頁８，15 頁（6），16 頁（4）》

陶磁器類の文様の中で唐草文様は数多く描かれています。これらの文様で県内に自生する葉の形状が近い種はノアサガオなどがあります。他のつる性の植物としてはヘビイチゴ、ヤブガラシなどが分布しています。

## 【イトバショウ】

《10 頁６，16 頁（2）》

学名は *Musa liukiuensis Mak* で、沖縄諸島および奄美諸島に分布し、沖縄が原産地となっています。栽培されているバナナの原種の１つで、最も耐寒性がある種といわれています。バナナに似た大型の草本ですが、実は生食できません。偽茎から繊維が大量にとれることで知られ、芭蕉布の原料として活用されています。その他の利用法として、茎のしぼり汁を熱さましに、茎葉や地下部を利尿に、生葉汁を止血に塗布したり、胃痙攣、腹痛、膀胱炎、下痢、赤痢、水虫、フィラリア症、火傷に薬効があるとされています。

## 【ケラマジカ】《17 頁（1）》

学名は *Cervus nippon keramae* で、慶良間諸島にのみ生息しています。日本国内に生息する鹿の仲間では小型の部類に入り、琉球王国時代の冊封使の宴席に供する等のために、今から約 350 年前の琉球王国時代に薩摩から移入されました。移入後は島の環境に適応し、九州産のニホンシカよりも小型となっています。（国指定天然記念物）
（龍の角のモデルは鹿の角とされている）

## 【インドクジャク】《17 頁３》

学名は *Pavo cristatus* で、インドおよびスリランカに分布しています。

一夫多妻で、上尾筒（尾のように見 える長い羽）の先端までの体長は 200cm にも達します。

近年、県内では人為的な持ち込みにより個体数を増やし、小型動物に悪影響を与えています。

## 【サンゴ】《18 頁５》

「サンゴ」は刺胞動物のうち石灰質の骨格を形成するいくつかのグループの総称で、狭義にはサンゴ礁を形成するイシサンゴ類を指し、六放サンゴに属します。

イシサンゴ類はミドリイシ類（写真）が代表的ですが、宝石に使用する「宝石珊瑚」は八放サンゴと呼ばれるグループになります。文様にデザインされているのは宝石珊瑚が相当と考えられます。

# ◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇ 用語解説 ◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

## 首里城（しゅりじょう）

県内最大のグスクで、伝承によると14世紀頃に察度が築城し、琉球処分（1879年）までの約500年間琉球王国の王宮として機能した。標高100～135mの琉球石灰岩の丘陵上に位置し、グスクの規模は、東西370m、南北213m、面積46.167㎡。首里城は、大きく外郭と内郭で構成され、外郭には歓会門、久慶門、木曳門、継世門を開く、内郭には瑞泉門、漏刻門、右掖門、淑順門、白銀門、美福門などを設け、正殿、南殿、北殿などの木造瓦葺きの諸宮殿など政治の中枢的な施設を建立した。正殿跡の遺構確認調査（基壇は、第Ⅰ期から第Ⅴ期までが重複）で第Ⅰ期基壇は、14世紀代に位置づけられている。

## 磁器（じき）

素地は白色で、半透明で吸水性のない硬い焼き物をさす。陶石を原料とし、長石・石英などを配合して素地とする。素焼きした後に施釉し、1,100～1,500度の高温で焼成する。中国漢代末に始まったとされ、宋代に完成された。

## 青花〈染付〉・（せいか）〈そめつけ〉

磁器の一種。いわゆる染付で、中国では一般的に青花（青花白磁・釉裏青）と称す。白色の素地にコバルトを含む呉須による絵付けを施したあとに、透明釉をかけて焼成する。還元焔焼成により白地に青い文様が浮かび上がる。中国でのコバルトの使用は唐代にみられるが、釉下に絵付けする手法を用いたのは宋代以降であり、元代に完成する。青花の主な生産地として景徳鎮窯および周辺諸窯があげられるが、明・清代には中国南部の各地に粗製の青花を生産する民窯が出現する。また、周辺諸国では中国の影響を受けて、ベトナムでは安南染付が、朝鮮では李朝初期から染付の製作が開始される。

※コバルト・・・・呉須などの天然の鉱物などに含まれる化合物で、青（藍）の材料として用いられる。

※呉須・・・・・・コバルト化合物を含む天然の鉱物をさす。これを極細粉末にして水に溶かし、文様を描いたあとに上から透明釉を掛けて焼き上げると藍色（青色）に発色する。

## 合子（ごうす）

蓋のある小型容器の総称。蓋と身を合わせるの意。盒（子）・合ともいう。多くは扁球形で、素材は陶磁器、漆器、金属器などで、用途には香合、化粧品入れ、薬味入れ、朱肉入れなどがある。元来は蓋物の身を転用したもの。

## 瓶（びん）

壺・甕類のうち、その最小のものをさす。瓶は元来は水を汲んだり物を炊く道具であった。のちに、陶器の器で口が小さく、胴部の膨らんだ物をいうようになった。徳利や花生けとして使用された。

### 引用文献・参考文献


・『やきもの辞典』　平凡社　1991年

・沖縄大百科事典刊行事務局『沖縄大百科事典』沖縄タイムス社　1983年

・金城亀信・上原 静ほか『首里城跡 ―京の内跡発掘調査報告書（Ⅰ）― 』沖縄県教育委員会 沖縄県文化財調査報告書 第132集 1998年3月

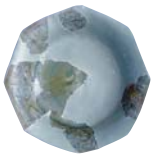
・那覇市立壺屋焼物博物館編『那覇市立壺屋焼物博物館開館記念 特別展 陶磁器に見る大交易時代の沖縄とアジア』那覇市教育委員会 1998年

・金城亀信・城間 肇『重要文化財 特別企画展 首里城京の内展 －貿易陶磁からみた大交易時代－』沖縄県立埋蔵文化財センター　2001年

1500

明

第二尚氏 | 第一尚氏


青磁雷文帯八角皿（中国）

青磁牡丹唐草文水注（中国）

青花牡丹唐草文梅瓶（中国）

ベトナム青花花唐草文面取瓶（ベトナム）

青磁双耳唐草文瓶（中国）

青磁高足杯（中国）

青磁口折印花双魚文皿（中国）

備前焼壺（日本）

青花松梅樹文双耳花瓶（中国）

褐釉陶器四耳壺（タイ）

青磁雷文帯碗（中国）

一四二〇　尚思紹、シャムに使を遣わす

一四二一　バレンバン（インドネシア）との交渉はじまる

一四二七　龍潭を掘り安国山を築く

一四二九　尚巴志、三山統一

一四五三　志魯・布里の乱が起こり、首里城炎上
―五彩の手法が中国・民窯で盛んになる

一四五四　尚泰久の即位

一四五六　冊封使の李秉彝ら来琉

一四五八　万国津梁の鐘鋳造

一四五九　首里城京の内倉庫が炎上

一四六三　マラッカへ使者を派遣

一四七〇　金丸（尚円）即位

〈第二尚氏王統始まる〉

一四七七　首里城歓会門、久慶門の創建

一四九〇　パタニ（タイ）と始めて交易
―この頃から、沖縄に入ってくる陶磁器が減少し始める―

一五〇一　玉陵を築く

一五〇八　首里城北殿の創建

一五二九　首里城守礼門の創建

一五七〇　南方貿易の記録途絶える

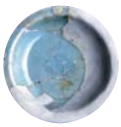
室町時代

1400　1300　1200

中国：元／南宋

琉球：察度王統／英祖王統／舜天王統

## 京の内の遺物


青磁口折蓮弁文皿（中国）

青磁牡丹唐草文盤（中国）

青花八宝文大合子（中国）

青磁口折蓮弁文皿（中国）

青磁吉祥字文壺（中国）

紅釉水注（中国）

青磁牡丹唐草文大花瓶（中国）

青磁蓮弁文壺（中国）

青花龍文高足杯（中国）

青花牡丹唐草文壺（中国）

五彩菊花文碗（中国）

## 中国・沖縄の主な流れ

六〇七　隋の煬帝、朱寛を琉球に派遣

―南宋から元にかけて陶磁器の輸出がめざましくなる―

―中国江西省・景徳鎮の台頭―

―この頃、景徳鎮で青花（染付）磁器が完成する―

―この頃、景徳鎮で五彩色絵が創作される―

一三五〇　察度、浦添按司から中山王となり首里へ

一三六八　明が興る

一三七二　中山王察度、はじめて明に進貢

一三八〇　山南王承察度、明に進貢

一三八三　山北王帕尼芝、明に進貢

一三八五　明の太祖、中山・南山両王に海船贈与

一三八九　察度、朝鮮（高麗）と通好する

一三九二　閩人三六姓、渡来と伝わる

一四〇四　冊封使、はじめて来琉

シャム（タイ）船渡来し交易

一四〇六　尚巴志、武寧王を討ち父・思紹を王にたてる

〈察度王統滅亡、第一尚氏興る〉

一四一六　尚巴志、山北王攀安知を討つ

日本：南北朝時代／鎌倉時代

※当センターホームページ（下記 URL）にて、本書のカラー版（PDF）を掲載予定です。
（ダウンロード可能）

重要文化財公開　首里城京の内跡出土品展
— 青花の文様で観る —

発行年月日　平成 20 年（2008）1 月 19 日
編集・発行　沖縄県立埋蔵文化財センター
〒 903-0125　沖縄県中頭郡西原町字上原 193-7
TEL　098-835-8751　　FAX　098-835-8754
URL　http：/ / www.maizou - okinawa.gr.jp

## 引用文献・参考文献


◎ 矢部良明「第 41 巻　元の染付」『陶磁体系　全 48 巻』株式会社 平凡社 1980 年9月1日初版第三刷発行。

◎ 藤岡了一「第 42 巻　明の染付」『陶磁体系　全 42 巻』株式会社 平凡社 1980 年 10 月1日初版第三刷発行。

◎ 大橋康二『古伊万里の文様』理工学社 1994 年。

◎ 三杉隆敏 編著『新装版 陶磁器染付文様事典』柏書房株式会社 1998 年6月 20 日第1刷発行。

◎ 岡登貞治 編『新装普及版 文様の事典』株式会社 東京堂出版 1998 年2月 25 日3版発行。

◎ 長谷部楽爾 監修 中沢富士雄・長谷川祥子 編著「第八巻　元・明の青花」『中国の陶磁　全十二巻』株式会社 平凡社 1995 年 12 月 11 日初版第一刷発行。

◎ 早坂優子『日本・中国の文様事典』株式会社視覚デザイン研究所 2006 年8月1日 第 12 版発行。

◎ 金武正紀・宮里末廣・松田朝雄『今帰仁城跡 発掘調査報告書Ⅰ』今帰仁村文化財調査報告書 第9集 今帰仁村教育委員会 1983 年3月。

◎ 金武正紀・宮里末廣・松田朝雄『今帰仁城跡 発掘調査報告書Ⅱ』今帰仁村文化財調査報告書 第 14 集 今帰仁村教育委員会 1991 年3月。

◎ 金城亀信・上原 静・城間 肇『首里城跡―京の内跡発掘調査報告書（Ⅰ）―』沖縄県文化財調査報告書 第 132 集 沖縄県教育委員会 1998 年3月。

◎ 大城 慧・島袋 洋・金城亀信・豊見山 禎ほか『湧田古窯跡（Ⅰ）―県庁舎行政棟建設に係る発掘調査―』沖縄県文化財調査報告書 第 111 集 沖縄県教育委員会 1993 年3月。

◎ 羽方 誠・片桐千亜紀・山本正昭・伊波直樹・山田浩久『与那国島 潮原古墓群―与那国空港拡張工事に係る緊急発掘調査―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 43 集　沖縄県立埋蔵文化財センター　2007 年3月。

◎ 島袋 洋・金城亀信・豊見山 禎ほか『湧田古窯跡（Ⅱ）―県庁舎議会棟建設に係る発掘調査―』沖縄県文化財調査報告書 第 121 集 沖縄県教育委員会 1995 年3月。

◎ 知念隆博・金城亀信・山本正昭・山田浩久・青山奈緒ほか『真珠道跡―首里城跡真珠道地区発掘調査報告書（Ⅰ）―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 32 集 沖縄県立埋蔵文化財センター　2006 年3月。

◎ 島袋 洋・島袋春美・田里一寿・古屋聡洋ほか『天界寺跡（Ⅰ）―首里杜館地下駐車場入り口新設工事に伴う緊急発掘調査―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 2 集　沖縄県立埋蔵文化財センター　2001 年3月。

◎ 島袋 洋・西銘 章・知念隆博・山本正昭ほか『天界寺跡（Ⅱ）―首里城公園管理棟新設工事に伴う緊急発掘調査―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 8 集　沖縄県立埋蔵文化財センター 2002 年3月。

◎城間肇・島袋洋・島袋晴美ほか『首里城跡 －下之御庭跡・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第3集　沖縄県立埋蔵文化財センター 2001 年3月。

◎山本正昭・岸本竹美・長濱健起・伊藤圭ほか『首里城跡 －御内原地区発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第 34 集　沖縄県立埋蔵文化財センター 2006 年3月。

◎ 大場達之ほか『オルビス学研学習科学図鑑　野外植物』オルビス学習科学図鑑 2　株式会社学習研究社　1994 年。

◎大井次三郎『標準原色図鑑全集10　植物Ⅱ』保育社　1978 年。

◎本田 正次『現代生物学大系7b　高等植物 B』 中山書店　1981 年。

◎ 本田 正次『現代生物学大系　7c　高等植物 C』 中山書店　1982 年。

◎ 室井綽『竹を知る本　～竹は木か草か～』 地人書館　1987 年。

◎ 池原直樹他『沖縄植物野外活用図鑑』新星図書　1984 年

◎ 片野田逸郎ほか『琉球弧 野山の花』 南方新社　1999 年。

◎ 小宮輝之『日本の哺乳類（フィールドベスト図鑑）』　学習研究社　2002 年。

◎ 當間順一 「ケラマジカの生態」『みどりいし(12)』　阿嘉島臨海研究所　2001 年。

## ご案内

第 29 回文化講座

**「今帰仁城跡と首里城跡出土の陶磁器について」**

【日時】平成 20 年 1 月 26 日（土）午後２時～４時

【場所】沖縄県立埋蔵文化財センター　研修室

【講師】金武 正紀（今帰仁村教育委員会発掘調査アドバイザー）

# 沖縄県立埋蔵文化財センター

〒903-0125　沖縄県中頭郡西原町字上原 193-7

TEL　098-835-8751　FAX　098-835-8754

URL　http://www.maizou-okinawa.gr.jp


開所時間 ：　午前 9 時～午後 5 時まで（入所は午後 4 時 30 分まで）

休　　所 ：　毎週月曜日、国民の祝日（子供の日、文化の日を除く）、
年末年始（12 月 28 日～ 1 月 4 日）、慰霊の日（6 月 23 日）
※祝日と月曜日が重なったときは、翌日の火曜日も休所、その他、臨時（燻蒸）休所あり

交　　通 ：　◇沖縄自動車道西原 IC より車で7分
◇市外線バスターミナル発那覇バス 97 番　「琉大附属病院前」下車徒歩 1 分

入　　場 ：　無 料